

# 農 林 水 産 大 臣 賞 受 賞

柑橘の有機栽培からスタートしたエコロジカルなむらづくり

受賞者 **地域協同組合無茶々園**  
(愛媛県西予市)

## ■ 地域の沿革と概要

平成16年4月、旧東宇和郡4町（明浜、宇和、野村、城川）と旧西宇和郡三瓶町の合併で誕生した本市は、伊予（愛媛県の旧称）の西部にあることから「西予市」と命名された。

人口40,330人（平成28年2月現在）、面積514km<sup>2</sup>、東側には高知県境のカルスト台地があり、西側は宇和海のリアス式海岸に臨み、海拔0mから標高1,400mの標高差を舞台とした多彩な自然環境が、平成25年、「四国西予ジオパーク」として認定され、貴重な地質や地形、歴史、文化、生態系など数多くの地域資源を活かした観光事業等の地域活性化が取り組まれている。

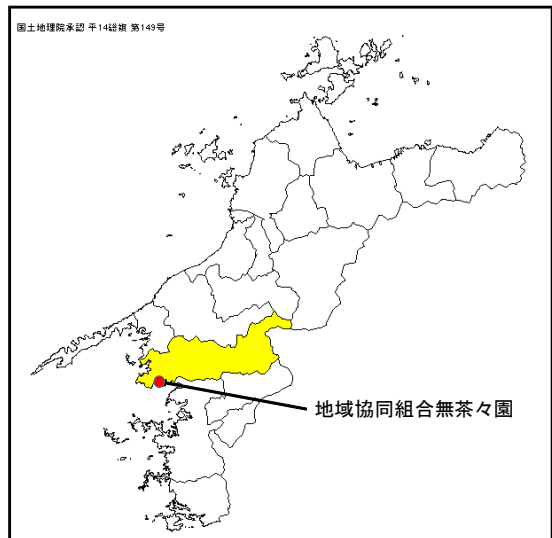
基幹産業は農林水産業で、多彩な自然環境や特異な気象条件を反映し、温暖な海岸部の柑橘栽培、冷涼な山間盆地の水田農業やいちご、ぶどう、茶栽培、中山間地域の畜産や野菜（きゅうり、トマトなど）、果樹（ゆず、栗）と水稻の複合経営など多種多様な農業が営まれ、四国一ともいえる多品目産地となっている。

## ■ むらづくりの概要

### 1. 地区の特色

狩江地区は、旧明浜町に合併する前は狩江村であった。旧明浜町は、西予市の西部に位置し、南側が宇和海に接している。狩江地区は、旧明浜町の中央部から東部に位置している。西予市中心部（旧宇和町）からは海岸沿いに西へ約15kmの距離で、車での所要時間は約20分である。周囲をリアス式海岸と急峻な山々に囲まれており、温暖な気候であり、雪が降る日は数日程度で

第1図 位置図



第1表 地区の概要

事 項	内 容
地区の規模	大字単位
地区の性格	機能的な集団等
農 家 率 (内訳)	34.0%
	総世帯数 341戸
	総農家数 116戸
専業別農家数 (内訳)	専業農家 54戸
	1種兼業農家 26戸
	2種兼業農家 25戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 543ha
	耕地面積 156ha
	田 0ha
	畑 0ha
	樹園地 156ha
	耕地率 28.7%
	農家一戸当たり耕地面積 1.3ha

ある。

農業と漁業が主要産業で、「四国西予ジオパーク」の景観ポイントでもある石灰岩を石積みした段々畑においては柑橘が栽培され、宇和海では養殖を中心とする漁業が営まれている。

狩江地区の人口は984人（平成22年）で、総人口に占める65歳以上の割合は47%（平成22年）に達し、高齢化が進んでいる。



写真1 段々畑から宇和海を臨む

## 2. むらづくりの基本的特徴

### (1) むらづくりの動機、背景

#### ア 有機農業との出会い

狩江地区の基幹産業である農業は、昭和30年代、さつまいも・麦から換金率の高い柑橘栽培へ切り替わった。昭和40年代、全国的な生産過剰などにより、販売価格が暴落した。そこで、産地間競争を生き抜くため、当時の明浜町では伊予柑、ポンカンなど、これまで以上に農薬や肥料を使用する高級柑橘類の栽培に取り組んだ。

しかし、昭和49年、このような農薬や化学肥料の使用を前提とした近代農業へ疑問を持った当時の青年農業者3名が、農家らしい暮らしや生き方を探求し、寺の住職から農地15aを借り受け、伊予柑の有機栽培を開始した。

「無農薬、無化学肥料栽培なんて無茶なことかもしれないが、そこは無欲になって、無茶苦茶に頑張ってみようや」との意味を込め、その園地を「無茶々園<sup>むちやちやえん</sup>」と名付け、40年続く活動の礎を築いた。

#### イ 試行錯誤を経た事業展開

初めて収穫した伊予柑は、外観が悪く、生果として販売できず、大半を加工原料用とせざるを得なかったため、有機農業では経営的に成り立たないのではないかと不安になることもあった。

昭和52年、松山市にある自然食品店の協力を得て、「無茶々園ブランド」の伊予柑を期待の価格で販売することができた。また、翌53年には、マスコミに取り上げられ、無茶々園の取り組みが一躍全国に知られたことで、この年の全量販売につながり、最大の問題であった販売面の不安を払拭することができた。これが有機農業の可能性が大きく広がる転機となった。

昭和54年には、一定の栽培体系を確立できたことから、構成員農家の園地での試作に移行するとともに、有機栽培を行う構成員数の拡大に努め、販売できる柑橘の生産量を増やしていった。旧明浜町は、柑橘農家に農薬や化学肥料を使うのが当たり前となっていたため、無茶々園の有

機栽培の取り組みが理解されるまでには時間を要したが、平成2年には、構成員数・面積が旧明浜町あけはまちょうの1割を超えるなど、有機栽培は若い農業者を中心に着実に浸透し、構成員数69名、栽培面積114haにまで増加した（平成23年）。

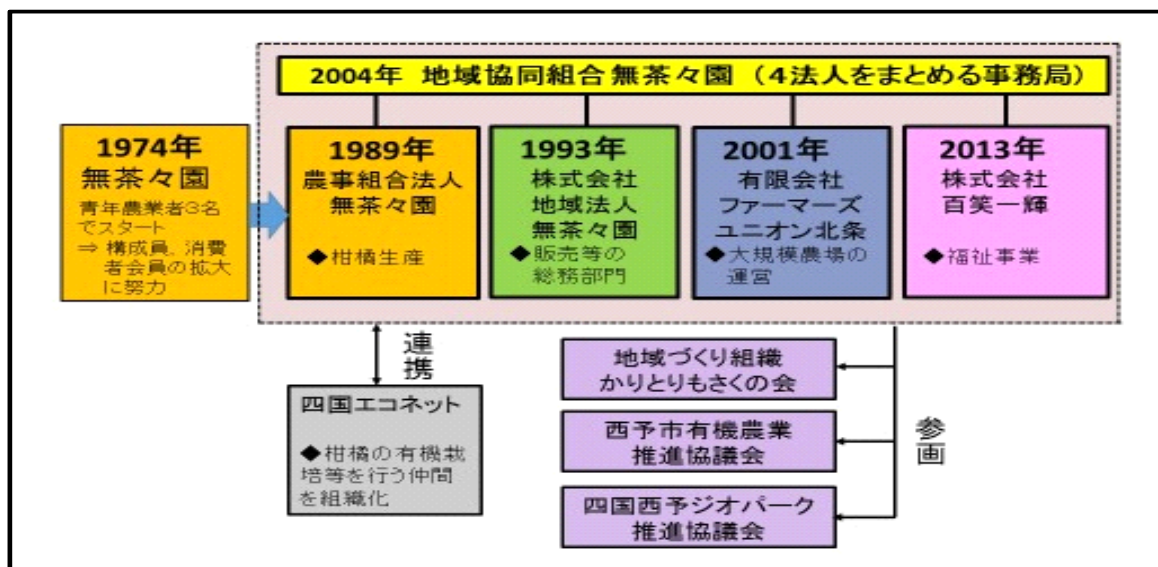
一方、市場、自然食品店、生協、消費者グループ、日本有機農業研究会を訪問し、栽培技術から販売に至るまでの手法を学びながら、消費者等と直接結びついた産直販売に活路を見出し、販路開拓に取り組んできた。現在、消費者会員は個人が約1万人、法人が約50社となり、農業産出額は平成27年度に8億円超となった。

## (2) むらづくりの推進体制

3名でスタートした無茶々園は、平成元年に「農事組合法人無茶々園」（以下、「農事組合法人」という）へと移行し、構成員である生産者は組員となった。平成5年には、農産物の販売等を行う総務部門を担う「株式会社地域法人無茶々園」（以下、「地域法人無茶々園」という）を、平成13年には、大規模有機農業を実践する直営農場を運営する「有限会社ファーマーズユニオン北条ほうじょう」（以下、「ファーマーズユニオン」という）を設立した。平成25年には、福祉事業に参入するため、「株式会社百笑一輝ひやくしょういつき」を設立した。これら4組織全体をまとめているのが、平成16年に設立した「地域協同組合無茶々園」であり、これらの組織をまとめて「無茶々園グループ」（以下、このグループを「無茶々園」という）と呼んでいる。

無茶々園は、狩江地区にある地域づくり組織「かりとりもさくの会」の中心となって活動に参画するとともに、行政、関係機関、関係者で組織する「西予市有機農業推進協議会」や「四国西予ジオパーク推進協議会」にも参画している。

第2図 むらづくり推進体制図



## ■ むらづくりの特色と優秀性

### 1. むらづくりの性格

無茶々園は、国内有機農業の先駆けとして、40年以上前から「食の安全・安心」の取り組みを実践し、厳しい地形条件の下で、生産管理システムを用いた消費者への情報提供、消費者ニーズを捉えた販売戦略、柑橘を原材料とした加工品のブランド化の推進など完成度の高いビジネスモデルを築き上げてきた。

また、研修生の受入体制も充実させており、大規模農場等を活用した新規就農者の育成にも努めている。

加えて、農業生産組織であった無茶々園が、漁業者と連携して山や海の世界作りを取り組み、地域環境の保全と漁業の振興を図るとともに、女性が活躍する高齢者への介護事業や配食サービス、高齢者の生きがいを創造するための活動にも取り組み、雇用の場の創出にもつなげている。

### 2. 農業生産面における特徴

#### (1) 有機栽培

無茶々園は、創設以来一貫して、除草剤、化学肥料不使用の柑橘栽培を実践し、有機栽培を主体とした環境保全型農業に取り組んでいる。

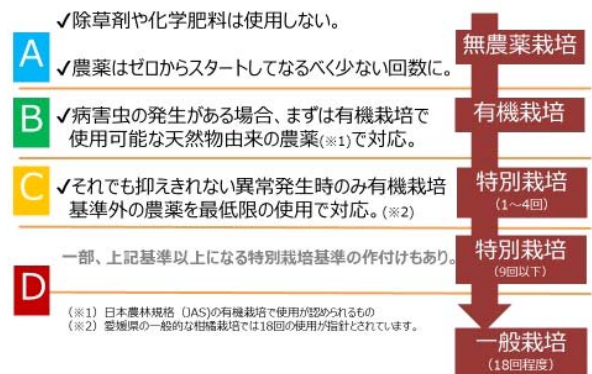
#### ア 無茶々園の有機栽培

無茶々園が目指す栽培は、あくまでも無農薬及び無化学肥料栽培である。農薬は、病害虫の多発による緊急時のみ、有機栽培で使用可能な薬剤を主体として、無茶々園が定めた農薬のみ使用可能としている。

肥料は、独自配合の有機肥料、指定の有機肥料及び堆肥を使用し、柑橘品質の均一化を図っている。また、有機農業の基本は土づくりにあることから、堆肥場を設置して畜産農家と連携した堆肥作りも実施している。

農薬の使用状況等により独自の格付け基準を設定するとともに、選別基準も独自に設定している。

第3図 無茶々園の栽培の考え方



#### イ 四国エコネット

無茶々園は、平成18年に「四国エコネット」を組織し、無茶々園の有機栽培の取り組みに賛同する生産者をこの組織の会員とした。無茶々園は、会員に対して栽培指導を行っているほか、生産した柑橘を事前の契約に基づいて、買い取り販売している。現在、四国エコネット会員数は88名にまで増加している。

## (2) 販売戦略

無茶々園は、1つの販売先に3割以上依存しないことを原則としている。個人会員への販売が約3割を占め、法人会員では、パルシステム生活協同組合連合会などの生協組織が約5割を占めている。

### ア 顔の見える関係の構築

販売額の約3割を占める個人販売の会員数は約1万人である。顔の見える関係を構築するため、農事組合法人の個々の農家が選果・箱詰めを行い発送している。

個人会員には、農家のメッセージ、栽培情報、返信はがき、機関紙「天<sup>てん</sup>歩<sup>ほ</sup>」をみかん箱に同封し、会員の意見等を栽培や経営に反映するよう努めている。

### イ 柑橘の加工事業

果汁100%ジュースやマーマレードなど定番の加工品に加え、平成19年には、伊予柑の果皮を利用した「伊予柑エッセンシャルオイル」を開発し、平成24年には、生産した柑橘の果皮エキスや真珠貝などを主原料としたコスメブランド「yaetoco (ヤエトコ)」を設立した。このブランド名は狩江地区の秋祭りの掛け声「やーえーとこー」から名付けたものである。



写真2 無茶々園の加工品

現在、yaetocoのコスメ商品は全国のコスメ専門店やバラエティショップなど122店舗で販売されており、最終目標として、柑橘の花、葉、摘果みかん、ジュース粕など、みかん山をまるごと商品化することを目指している。

### ウ 情報通信技術を活用した生産管理

農事組合法人は、消費者ニーズや販売実態に合わせ、温州みかん、伊予柑、ポンカンを主体に約30種類を栽培しており、栽培面積、品種、生産者の増加に伴い、一層の生産管理の強化に努めている。

#### ① パソコンによる生産管理システム

平成12年、農事組合法人の組合員にパソコンを導入し、独自開発の生産管理システムにより農薬や肥料の使用履歴、作業日誌など生産情報の入力を行っている。

平成15年には、インターネット環境を利用した新システムを導入することで、一元管理による情報の共有が可能となり、さらに、販売管理システムの注文情報をつなぐトレーサビリティシステムを構築した。

この消費者に生産情報を提供する取組は、組合員の経営改善にもつなが

っている。

## ② 光センサー選果機の導入

無茶々園に柑橘を出荷する生産者の増加により、成分（糖度、酸度）のばらつきが問題となってきたことから、平成14年に宇和選果場に光センサー選果機を導入した。これにより、均一な品質の選果と取引先が求める成分の柑橘の販売が可能となった。成分情報は、生産者にフィードバックすることにより、生産者の柑橘生産に対する意識の高揚にもつながっている。

### （3）新規就農者の確保育成

#### ア 研修生受入体制の充実

無茶々園は、農業を志向する研修生を受け入れ、新規就農者として育成するため、平成10年、狩江地区に研修生の宿泊施設となる「研修センター」を設置した。翌11年には、研修実施組織である「ファーマーズユニオン天歩塾」を設立し、現在8名の若手スタッフが農業を実践しつつ研修生を指導している。

研修は、農業への理解を深めることを目的とした1年以内の短期研修に加え、独立就農や無茶々園スタッフを目指すための1年以上の長期研修がある。研修開始以来、37名の若者が長期研修を受講しており、平成28年6月現在、そのうち、農事組合法人の組合員の担い手として就農した者が4名、県内外で就農した者が10名、ファーマーズユニオンのスタッフとなって農業を実施している者が8名、無茶々園の事務局スタッフとなった者が4名と、計26名が各方面で活躍している。

また、平成14年から、海外（フィリピン、ベトナム）からの研修生も受け入れている。海外研修生は、労働力という側面だけでなく、1～2年程度の研修終了後、祖国で有機農業の実践ができるようにすることを主目的としており、ベトナムに「有機農業センター」を開設し、研修生の育成と胡椒等の栽培支援と日本への輸出にも取り組んでいる。

#### イ 大規模有機農業への展開

無茶々園は、農薬・化学肥料を使わない大規模有機農業を実践するため、平成11年に南宇和郡愛南町に5haの甘夏園の城辺農場を取得した。次いで、平成16年には、松山市に13haの北条農場を、平成24年には、旧明浜町に1haの明浜農場を取得し、大規模農場の規模は現在19haとなっている。

現在、長期研修を経たスタッフ8名が、海外研修生4名とともに、試行錯誤しながら、有機JAS認証の甘夏、レモン（城辺農場）、野菜、果樹（北条農場）、温州みかん（明浜農場）の生産



写真3 有機農業に励む若者たち

に取り組んでいる。

### ウ 若手の積極活用

無茶々園は、若手の次世代のリーダー育成にも力を入れている。

「地域法人無茶々園」などの新規雇用者のうちの約7割は県外からの雇用となっている。現在、福祉事業等を行う株式会社百笑一輝を除いた社員数は55名で、その平均年齢は38歳となっている。

また、現在、組合員数が69名の農事組合法人には、45歳以下の農業後継者が21名いるが、その若手農業者の一部を役員に登用するとともに、若手経営者会議を開催し、その場でも出された意見を経営に反映している。

## 3. 生活・環境整備面における特徴

無茶々園は、地域の漁業者や地域づくり組織と連携し、「山海の自然を楽しみ、高齢者の生きがいがあり、誰もが健康で長生きできる理想の里にしたい。」との思いで地域づくりに積極的に取り組んでいる。

### (1) 地元漁業者との連携

狩江地区のもう一つの基幹産業は漁業である。宇和海近海を中心とする漁業は、昭和30年代後半、イワシ網漁の「獲る漁業」から真珠・ハマチなどを養殖する「作り育てる漁業」へ転換した。

無茶々園は、「地域循環型一次産業の育成」をコンセプトとして、地元漁業者と連携し、地域住民や消費者会員を巻き込んで、宇和海の環境を維持・向上するため、廃油石鹼作り、海藻の森づくりのためのワカメ植付けなど「豊かな山と海の環境づくり」を実践している。

また、無茶々園は、地域の水産物生産者団体と連携して、平成3年から水産物の加工・販売を開始し、現在、ちりめん、真珠、海藻類（わかめ、ひじき）の加工・販売を行っている。



写真4 ワカメの植え付け作業

### (2) 福祉活動と女性の活躍

#### ア 婦人部「なんな会」

無茶々園が発足して9年後の昭和58年、無茶々園婦人部「なんな会」が発足し、廃油石鹼づくりや合成洗剤を極力使わない環境保全活動を実施してきた。

平成7年、旧明浜町の協力の下、ホームヘルパー3級講座を開講した。平成9年からはホームヘルパー2級講座も開講し、講師の派遣依頼や会場設営等の準備には「なんな会」が中心となり尽力し、これまで130人の2級ヘルパーを養成している。この取組が、後にこの地域を

福祉の町へと変貌させるきっかけとなった。

## イ 福祉事業への参入と高齢者が働けるデイサービス

狩江地区には、社会福祉法人が営む高齢者福祉施設があり、ホームヘルパー講座受講者の雇用の受け皿となってきた。しかし、この地域の高齢化率が約5割（平成22年）となったことから、ホームヘルパーのアンケート調査では、更なる福祉施設の建設の要望も寄せられた。

そのため、無茶々園は、生涯現役でいられる福祉の地域づくりを創造するため、平成25年、「株式会社百笑一輝」を設立し、福祉事業へ参入した。平成26年2月には、住宅型優良老人ホーム兼たわらづデイサービス事業所「めぐみの里」を狩江地区に隣接する俵津地区に開所した。

「めぐみの里」では、介護予防を重視したデイサービスを目指している。

現在、入所施設8部屋は満室で、デイサービス（35人定員）は約30人の利用実績となっており、利用者からの評価も高い。平成27年11月には、2ヵ所目の事業所「みさと海里」を同地区に開所している。

これらの事業所では、女性のホームヘルパーを中心に、約40名が活躍している。



写真5 福祉事業での女性の活躍

## ウ 配食サービス

ホームヘルパー講座終了後のアンケート調査で、地域の配食サービスに関する要望が多く寄せられた。高齢者の食生活への心配と自分達の老後にもあればいいという思いから、平成21年、農家女性4人が有志の会「てんぽ屋」を設立し、週1回、お弁当の配食サービスを開始した。

当初は、高齢者へのサービスであったが、独身男性の利用者も増えている。メニューは全て手作りのおふくろ味で、食材は地域の食材を活かし、高齢者や地域住民に好評を得ている。毎週約30食程度を配食し、随時仕出しなどの注文も受けている。

## (3) 高齢者の生きがい創造

平成19年、農事組合法人組合員の有志が、高齢者の生きがい創造を目的として、無茶々園の中に「妄想コンドルの会」を発足した。

高齢者でも可能な「生きがい農業」として、きぬさやえんどう、いんげんなどの軽量野菜栽培の推進にも取り組むなど、高齢者が元気なうちにはできるだけ働き、困ったときはお互いに助け合うという趣旨で活動している。



#### (4) 都市消費者等との交流

消費者と顔の見える関係を構築するとともに、自然環境保全の重要性等についてPRするため、東京で開催する大手生協などの都市消費者との交流のほか、みかん収穫体験、漁業者と連携した小学生のワカメの植え付け作業、真珠ペンダントづくり、海の水質調査など、都市部の消費者を招いての交流活動に積極的に取り組んでいる。



写真6 消費者交流(真珠ネックレス作り)

また、有機農産物や食べ物の生産過程を知ってもらうため、西予市だけでなく東京の保育園、小・中学校、特別支援学校に対する「給食時間訪問」や「食育授業」にも取り組み、平成21年から6年間で、のべ81校、3,321人を対象に実施している。

これらの交流は、消費者と生産者の相互理解を深め、販売増加にもつながっている。

#### (5) 廃校となった小学校の校舎を活用した活動の広がり

平成27年3月に明浜小学校に統合され廃校となった狩江小学校の校舎について、平成28年7月以降は、無茶々園が運営を委託されることとなった。今後、この校舎を活用し、「総合福祉拠点の設立」、「直売所の開設」、「観光事業の拡充」などの新たな取組を開始することとしている。

このうち、観光事業については、地区の段々畑が「四国ジオパーク」に認定されたことを受け、平成26年度から「段々畑のガイド」の育成、海上から段々畑を眺める「海コース」の設定などを行い、平成27年度には、29団体366名の観光客を受け入れている。今後は農家民宿の開設などにも活動を広げていく計画である。